

中村真里絵氏の書評への応答 ——語りえぬ実践の民族誌の物足りなさとは？

大西秀之

著作を刊行するということは、その評価や解釈を読者に委ねることにほかならない。むしろ、そこには明白な誤読や過剰な要望が介在している危惧が常にある。だが、それらが個人の内や私的なサークルでなされる限り、それを正す術は著者にはない。そういった意味で、ある著作の批評を公にする書評なるものは、その例外といえる。というのも、著者も一読者として書評を読み、批評することができ、場合によってはそれを公にすることさえも可能だからである。ただ、わたし個人としては、学術論文のなかでの批判ならまだしも、自らの著作の書評に対して直接リプライし、それを公にしようなどとは夢にも思っていなかった。むしろ、そうした振る舞いは、テキストの自由な読みを妨げるようで、若干の後ろめたささえ感じてしまう。

283

とはいうものの、この度、拙著『技術と身体の民族誌——フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』の書評を掲載される本誌より、リプライの機会をいただけるとの申し出に応じたのは、ひとえにその企画の意図に賛同したからにほかならない。正直に言えば、書評と同時に著者からのリプライも一緒に載せるとは、評者にとっても著者にとってもいささか酷な企みではないか、との思いを抱いてもいる。ただ、書評もまた自由な読みの対象となるテキストと捉えるならば、その企画の意図は十二分に理解できる。

他方で、中村真里絵氏からよせられた批判は、文化／社会人類学サイドから提起されるだろう、と事前に予期していたものだった。このため、誤解を招くような物言いにはなるが、ある意味で今回の書評は、わたしにとって格好の補論の機会を与えてくれる内容となっている。換言すれば、中村氏の批判に応答することによって、拙著の不足を補い新たな議論を提示することが可能となる。

以上のような意図の下、拙著の書評に対するリプライを行いたい。ただし、ここでの目的は、中村氏の書評に対する反批判ではなく、むしろ拙著に対する疑問や批判に答えるなかから新たな議論を提示することにある。この点、誤解がないよう、あらかじめ明記しておきたい。

さて稿を進めるにあたり、基本的な疑問への回答から行うこととする。まずは、「民俗

工芸」という表現を採った理由であるが、これは単純に folk craft の直訳として使用した限りである。では、なぜ folk craft を選択したかであるが、traditional craft（伝統工芸）や ethnic craft（民族工芸）などの語彙を使うことは、拙著で取り上げた土器作りや機織りを無前提に「伝統」や「民族」と価値づけることになるため、単純に躊躇を覚えたからにはかならない。こうした判断は、文化／社会人類学のみならず本質主義批判を経験した研究領域であれば理解できないものではないだろう。ちなみに、folk craft は、現地の人びとが自ら公に採用していた英訳であったことも選択の理由である。

次に指摘すべきは、基本的であるが修正すべき事実の誤認である。それは、拙著の基となった現地調査が5ヶ月のみで行われた、という指摘である。この記述は、正確には拙著の第3～4章に該当する、ピラ村における土器作りに携わった期間である。確かに、第5章の一部データは、当該期間に収集したものではある。だが、第5～6章は、その後に断続的に行った数ヶ月間の現地調査の成果に基づいている。このため、「本書の基になるデータは、1996年3月～7月の5ヶ月間という調査期間のなかで収集された」との記載は、さすがに修正せざるをえない。もっとも、この指摘は、あくまでも事実誤認の修正であって、それ以上の意図を含むものではない。ましてや、拙著が一般の——と断言していいものか多少の躊躇を覚えるが——文化／社会人類学者に劣らない長期間の民族誌調査に基づいているなどと、抗弁するつもりはまったくない。したがって、拙著が立脚する現地調査に対する評者の批判は、期間に関しては間違いとはいえないだろう。

むしろ、わたしが問題視するのは、「技術をとりまく民族性や地域性、人びとの生活に関する記述が少なく、物足りなさを感じてしまうのは、そうした限られた期間のなかで調査をおこなったことによるものと考えられる」との批判である。この批判は、どう読んだとしても、評者にとっての「物足りなさ」の原因は調査期間の短さに起因している、との断定である。だが、現地に長期滞在したならば、評者が要望する「技術をとりまく民族性や地域性」を提示できる、と果たして無前提に担保できるのだろうか。わたしには、にわかには合意できないし、そもそもその自信もない。いうまでもなく、民族誌調査によって描き出されるものは、すべからず調査の目的や方法、対象社会の状況、調査者の資質などに左右される。であれば、たとえ「長期」の現地調査を実施したとしても、評者の要望を満たす民族誌情報を収集できる必然性はどこにもない。

とすれば、ここで議論の焦点にできるのは、調査の目的や方法となる。なぜなら、対象社会の状況や調査者の資質などの要因は、偶然性や個別性が介在するため、調査結果の成否の判断基準となりえても、基本的に議論を交わす余地のないものだからである。とはいえ、拙著でしめした目的や方法を、繰り返し説明することは生産的ではないだろう。このため、評者の批判に応えることにより、調査の目的と方法を論じたい。

評者の批判のポイントは、言語——というよりも厳密には当事者の語り——に対するアプローチの不足あるいは欠落とまとめられる。評者の表現を借れば、「言語でしかアプローチできない領域がどのように重なっていくのかについては明記されていない」という点に要約できるだろう。くわえて、評者は、「本書の企てからはずれるかもしれないが」と留保しつつも、「技術を行使する担い手の経験や生き様、そしてその人が背負ってきた

かもしれない社会的な差別や排除の語りなども、技術的实践を理解するうえで無視できない側面ではないだろうか」との批判をくわえる。

上記の批判に対して、「言語でしかアプローチできない領域」とは具体的にどのようなものか、また拙著では「担い手の経験や生き様」の記述がまったくないのか、あるいはなぜ「社会的な差別や排除の語り」が「技術的实践を理解するうえで無視できない」のか、という疑問や反批判を——著者という立場でなくとも——提起したくなる。だが、これらの直接的な回答は明示されていない。それに代わり、評者が具体的に示唆しているのが、「インフォーマントによる行為や事象への認識についての記述を避け、それにかかわる議論に踏み込まなかった」という批判である。

しかし、この批判を受けた時、性別分業によって営まれている土器作りや機織りの実践と伝習はジェンダーの再生産を担っている、という拙著の主要な成果は「行為や事象への認識」に関する読み解きではないのか、と逆に問いたくなる。もっとも、この「認識」は、当事者の発話によるものでも、明確に言語化されて共有されているものでもない。だが、技術的实践がジェンダーにかかわる認識に言語化されないレベルで関与している、との社会のあり方は、むしろ拙著が積極的に追究したものにはかならない。また、この言語化されない実践による認識の形成は、文化／社会人類学にとっても追究すべき既知の課題なのではないだろうか。というのも、文化／社会人類学の民族誌調査とは、文化的他者の経験世界を捉えようとするものであり、決して単なる現地でのインタビューなどに還元されるものではない——と少なくともわたしは確信している——からである。

といったリプライをすると、それは中村氏の書評の主旨を逸した的外れな反批判ではないか、との疑義を招くかもしれない。批判の主旨は、評者が言明しているように「そこに住まう人びとが何を語り、その行為をどんな考えのもとに実践しているのかを記述し、理解しようとする」ことを怠っていることだと。まず、この点に関しては、まったく反論するつもりはない。と同時に、その理由は拙著の主題ではなかったためであることを、改めて明記しておく。

その上で、拙著の視座から、ひとつ問題提起をしたい。それは、土器作りや機織りを実践している当事者の「語り」や「考え」とはなにか、という問いである。結論から述べるならば、それらは無前提に現地の人びとに保持され共有されている、と決して自明視すべきではないものである。拙著でも指摘しているように、日常の営みのなかで自転車に乗っている人物や料理を調理している人物が、自ら実践している「自転車に乗る」や「料理を調理する」にまつわる「語り」や「考え」を、あらかじめ保持し共有しているなどと到底言明しえないことは、われわれ自身の日常を想起するだけで十分だろう。

したがって、誤解を恐れずにいうならば、技術的实践にまつわる「語り」や「考え」とは、調査者が当事者に問うことによって創出される発話ではないのか、という懷疑を完全には否定できないだろう。むしろ、技術的实践の「語り」や「考え」のすべてが、その限りであるわけではない。また、わたし個人としては、そうしたアプローチ自体を否定しているわけではなく、むしろ調査者と当事者の「共同作業」として発話が創出されてゆくプロセスそのものに関心を持ち、その重要性を認識している。とはいえ、拙著の目的は、

繰り返しにはなるが、そうした発話の背後に控える言語化されない実践を記述し理解することにあった。

だがそれでも、現地の人びとの語りに対する不足や欠落を指摘する批判を、拙著は受け続けるだろう。おそらくそれは、無理解によるものではなく、「語られない実践に比して、実践を語るコトバに対する配慮が不足している」ことへの拭いがたい不満によるものと認識している。そうした不満は、わたしにとって理解も承服もできないことではない。なぜなら、拙著を貫く問題意識が、「実践を語るコトバに比して、語られない実践に対する配慮が不足している」のではないか、という既存の文化／社会人類学をはじめとする民族誌研究に対して抱いた、わたし自身の不満と正反対であるが同質のものだからである。

であれば、ここまでの批判の応答は、憂うべきものではなく、異なる視座に基づく相互補完関係にある議論とみなすことができる。こうした議論は、単純にひとつの視座に基づく批判よりも、新たな研究展開を切り拓く可能性をより孕んでいるといえよう。そういった意味で、本稿は、空虚な批判の応酬としてではなく、わずかでも生産的な議論に繋がるよう配慮したつもりである。むろん、その成否は、読者の判断に委ねるしかない。とはいえ、その機会をえることができたのは、御多忙ななか拙著の書評の労をお取りいただいた中村真里絵氏と、貴重な紙面を割いて拙著を取り上げていただいた本誌『Contact Zone (コンタクト・ゾーン)』編集部の御高配の賜物にほかならない。文末ではあるが、改めて深く謝意を申し上げたい。

そういえば、ひとつ中村氏の重要な批判にできていなかった。それは、「物質性の違いが技術的実践の場において、どのような差異や共通性を生み出しているのかについて、ほとんど議論されていない」との批判である。拙著の主旨から逸れるため、本稿では取り上げなかったが、既に追究している課題である。怠慢かつ移り気な性分のため、何時になるか確約はできたものではないが、願わくは今後の研究展開を気長にフォローしていただければ幸いである。